

**カフカブーバー  
シオニズム**  
中澤英雄著 オンブック  
定価 三二五〇円

ドイツ文学専攻の中澤英雄・東京大学大学院総合文化研究科教授の新作は、ドイツ語系ユダヤ人作家フランツ・カフカの、ユダヤ人問題やシオニズムとの関係を解明することを主な目的としている。

第一部ではカフカのユダヤ人的出自、東欧のアイテシユ劇団との出会い、マルティン・ブーバーとの対決などを通して、アトム化した西欧ユダヤ人と民族共同体をもつ東欧ユダヤ人との対比を描き出す。そこに浮

かび上がるのは、人間の共同生活のためには宗教が「核心の問題」であるという認識である。カフカはこの問題意識をブーバーと共有するが、ブーバーの文化シオニズムに同意することはできなかった。著者の論述はさらに第五部「万里の長城」(中国を舞台にしたこの作品はユダヤ問題の描写)、第六部「二つの動物物語」(ジャツカルはユダヤ人の隠喩、猿は同化ユダヤ人)の作品分析に向けられる。

宗教学者としての評者の関心を引くのは、ユダヤ人のアイテシユ問題である。それは、カフカたち二十世紀初頭の西欧ユダヤ

人に固有の問題であつたと同時に、「どこでも、いつでも、誰でも」出合う可能性がある問題ではないか。人はすべて特定の家族・国家・民族・宗教の中に生まれてくるが、そのような特殊な限定を背負った人間どうしが共同体を形成し、平和共存できる場が開かれるとすれば、それは一体どこなのか。国家・民族・宗教という特殊性を超えて普遍性の地平に出ることと、特殊性に自己のアイテシユの基礎を置くことは、矛盾することなのだろうか。こうした特殊と普遍のせめぎ合いが、アイテシユ問題の根底に潜んでいるように思われる。特殊

(ユダヤ)と普遍(人類)の止揚がユダヤ的メシアニズムの根本問題であることも本書は指摘する。

著者はカフカの人間模様や思想的な影響関係を丹念に調べ上げる手法に徹するが、その精緻な考察の底に透けて見えるのは、個と共同をめぐる人間存在の「核心の問題」への眼差しである。それはカフカの課題であり、著者の問題意識でもあるのだろう。そのような問題意識が隠れた通奏低音をなしている点で、本書には類書にない独自の価値がある。 評・棚次正和

(京都府立医科大学教授・主著『宗教の根源——祈りの人間論序説』(世界思想社)、『祈りの人間学』(世界思想社)ほか)

**諜報の天才 杉原千畝**  
白石仁章著 新潮選書  
定価 二二五五円

ヒューマニスト(人道主義者)の外交官、杉原千畝の存在は、いまではよく知られている。リトアニアの日本領事館に大勢のユダヤ人難民が通過ビザを求めてやって来たとき、本国の方針に反してビザを発給すべきかどうか悩んだ末、良心に従って服務違反に問われることも、自分や家族の命も危険にさらすことも厭わず、ビザを発給した。それで、六〇〇〇人の命は救われた。しかし、戦後外務省を解雇された、という。

この従来の定説は主に、杉原幸子夫人の著『六千人の命のビザ』に始まっているようだ。しかし、その定説に割り切れない編者は「杉原千畝のビザの謎」(日本とユダヤ その友好の歴史)に疑問点を書いて、慧眼の研究者の出現を待った。この度刊行された本書で、外交史料館の白石仁章が明快に数々の疑問を解決してくれている。

杉原のインテリジェンス・オフィサー(諜報士官)としての側面は、すでに手嶋龍一著の小説『スギハラ・ダラー』(新潮社)において、紹介されていた。本書はそこに焦点を当てた杉原千畝研究の本格的

評伝でありながら、だれにも読みやすいノンフィクションである。現存の外交史料を基に、それ以外の曖昧な証言や伝聞によらず、杉原の生涯を時代の文脈の中において、その知られざる事績を追求している。

本書を通して蒙を啓かれる点は、風雲急を告げる第二次世界大戦の直後の、ドイツとソ連の国境地帯のリトアニアにおいて「耳の長いウサギ」(諜報のベテラン)である杉原は、ナチスよりもソ連軍の進駐を、ポーランド難民(ユダヤ系の人々であつた)の命運の危機と悟り、彼らを見捨てることは日本の国益にならな

いと判断したとの著者の示唆である。ヒトラーよりもスターリンを警戒したこと、ビザ発給のために本国にいろいろアライ工作をしかけたこと等々、という、白石氏の見立ては杉原像に深みを与えるものである。

大戦中、ポーランド情報組織が、杉原およびラトビアの小野寺・陸軍情報士官に協力していたという事実は全く知られていない。杉原ビザは、情けは人のためならず、の役を果たしていたのだ。しかし、諜報の天才の命がけの活動による、極めて重要な情報が本国で活かされなかつたことは、杉原のみならず、後代の本書の読者にも痛恨事であろう。